

皆様おはようございます。8月も下旬に入って参りました。いよいよ新型コロナウイルスの蔓延が拡大して参りました。東京の方では医療崩壊が進み、自宅療養・宿泊療養者の人数が、入院できた人の人数の10倍以上という、異常な事態が続いています。コロナ感染した妊婦が病院に行けずに亡くなったり、病院に行けないコロナ患者が自宅で亡くなっていたりという、いよいよそういうニュースを耳にするようになりました。そしてその病気の勢いが全国に広がろうとしています。

神様がこの国と世界を助けてくださいますように、そして私たちと家族をお守りくださいますようにと祈ってやみません。どうか皆様方もくれぐれもお体にお気をつけいただきたいと思えます。

さて先週の箇所はアナニアとサフィアの出来事でした。本当に神様のお厳しい、まっすぐな裁きがここには記してありました。一方でそこにあったのはサタンの働きでした。サタンが彼らの心を満たし、我が物としていました。アナニアとサフィアはサタンに心を許してしまいました。

神様を知らないだろうと、高をくくって、こともあろうに神の霊を欺き、神様を欺き、その人間の底知れない浅はかさや神の前の不遜によって神様を欺いてしまいました。それに対して神の裁きが降った出来事でした。

しかし私たちはイエス様の贖いによってその不遜を罪を赦され、身代わりとなったイエス様のご功績によって私たちは命を与える聖霊で満たされていることに感謝したいと思います。そしてそのように進む弟子たちの手によって多くのしるしと不思議な業とが民衆の間で行われました。神様がその恐れかしこむご自身の弟子たち、イエス様の贖いによって聖霊をいただいて進む彼らの手に神様が御手を添わせてくださって、使徒たちの手によって多くのしるしと不思議な業とが行われました。そして人々が敬意を示し、そして信じる人々が加えられていきました。

これを見て大祭司とサドカイ派の人々、そして最高議会の人たちはどう思ったのでしょうか。ここまできたらさすがに神様の御業を認めざるを得ない。イエスキリストを十字架につけたことを後悔し、悔い改め、懺悔し、他ならない生ける神様の前に赦しを乞うたのでしょうか。そうではありませんでした。大祭司と仲間の者たち、権威ある、力ある人たちは相も変わらず神を恐れず、自分の事しか考えていませんでした。彼らは妬みの念に燃えていました。なんであんな奴らがこんなにも大それたことをしでかしているのだ、けしからん、間違っているとさばきながらも、妬ましい、うらやましいという気持ちが渦巻いていました。そして光の弟子たちを逆恨みしてそして妬みの気持ちでその弟子たちの勢いをねたんで恨んで、自分のプライドと、妬みの気持ちと、その入り混じった自己中心な思いから使徒たちを捉えて公の牢に入れました。

それはヘロデが道ならぬ結婚を批判されて洗礼者ヨハネを牢に入れて首を切った時のことを思い出します。権威ある自分が、王様になって、神様をも恐れなくなってしまう。権力とは、本当に怖いものです。人に対しての、実に大きな誘惑です。またもサタンは、人の心の中を満たすために心の戸をノックしています。そしてそれに応えて戸を開けば、人は神を恐れずに、神をあなどり、神を迫害するものへと転落してしまうのです。

イエス様はそうならないようにとマタイ20章にておっしゃいました。

20:25 そこで、イエスは一同を呼び寄せて言われた。「あなたがたも知っているように、異邦人の間では支配者たちが民を支配し、偉い人たちが権力を振っている。

20:26 しかし、あなたがたの間では、そうであってはならない。あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、

20:27 いちばん上になりたい者は、皆の僕になりなさい。

20:28 人の子が、仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのと同じように。」

このお言葉は、いつまでも私たちが大切にしていなければならないことなく思い続けるべき主の救いの言葉、命の言葉です。

そして、ここで祭司長、律法学者たちが妬みの気持ちによって使徒たちを牢に入れたという出来事は、イエス様を十字架につけて殺してしまったこととも思い出させます。

しかし19節には「ところが」という言葉が添えられます。

5:19 ところが、夜中に主の天使が牢の戸を開け、彼らを外に連れ出し、

5:20 「行って神殿の境内に立ち、この命の言葉を残らず民衆に告げなさい」と言った。

その迫害の夜中、牢の中であって、主の天使がやってきて、閉ざされた牢の中に道を開け彼らを外に連れ出しました。そして語りかける声がありました。

「行って神殿の境内に立ち、この命の言葉を残らず民衆に告げなさい」

17節、18節 5:17 そこで、大祭司とその仲間のサドカイ派の人々は皆立ち上がり、ねたみに燃えて、5:18 使徒たちを捕らえて公の牢に入れた。

大祭司と仲間のサドカイ派の人々は皆立ち上がり、ねたみに燃えて使徒たちを牢に入れたとあります。「立ち上がる」というのは人の確固たる決意と確信を表します。実行を表します。心を決めたということを表します。大祭司とサドカイ派の人たちは妬みのゆえに愚行を心の中に確固と定めて立ち上がりました。心を決めて、もうふりむかない、もう心を決めたことと迫害に進みました。しかし天使は牢の中で使徒たちを助け、そして行って立ち上がりなさいと逆に命

じられました。この命の言葉を残らず民衆に告げなさいと語りました。この命の言葉、それは命を与えるイエスキリストの贖いの十字架による神の救いの出来事です。使徒言行録4章12節にありました通りです。4:12 ほかのだれによっても、救いは得られません。わたしたちが救われるべき名は、天下にこの名のほか、人間には与えられていないのです。」

この主イエス・キリスト、救い主の御名を伝えること。これがこの命の言葉を残らず民衆に告げなさいということの意味です。行って立ち上がりなさい。恐れることはない。私があなたと共にいる。人を恐れるな。私を信じ行ってしっかりと立ってこの命の言葉を残らず民衆に告げなさい。またどのような迫害に遭うかと言う事は恐れなくても良い。私があなたと共にいると主は語られ、生きなさい、神殿に立ちなさい。迫害者を恐れるなと告げました。

私たちが恐れるべきものは何でしょうか。困難でしょうか、迫害でしょうか、人から蔑まれることでしょうか。病気でしょうか、欠乏でしょうか、苦しみでしょうか。どんどんどんどん行き詰まっていく人生でしょうか。私たちには諸々の恐れがあるでしょうか。しかし夜中に牢の中で、まさにその失意の中に天使が現れ、天使を送られた神様がそこにとともにおられ、私たちの失意は希望の朝に、夜明けに変わるのだということを私たちが知ることができるのです。5:21 これを聞いた使徒たちは、夜明けごろ境内に入って教え始めた。

一方、大祭司とその仲間が集まり、最高法院、すなわちイスラエルの子らの長老会全体を召集し、使徒たちを引き出すために、人を牢に差し向けた。

この日の朝早く、二つの動きがありました。一つは天使に励まされ、牢から解放されて神殿に立ち、命の言葉を語る弟子たちの姿、そしてもう一つは、ねたみに燃え、殺意に満ちて夜明けを待つようにして、実に朝早くから裁きの座に立たせるために牢から使徒たちを引きずり出そうと企てていた人たちでした。

バプテスマヨハネが殺され、イエス様が殺されたように彼らはまたも迫害を極めようとしていました。あの時みんなの前に立たせて、もうあの御名によっては言わないようにと言っただろう、それを破ったらお前たちはどうなるか分かっていたらろうと、問い詰めようとしていたことが手に取るように分かります。

5:22 下役たちが行ってみると、使徒たちは牢にいなかった。彼らは戻って来て報告した。

5:23 「牢にはしっかり鍵がかかっていたうえに、戸の前には番兵が立っていました。ところが、開けてみると、中にはだれもいませんでした。」

イエス様の復活の出来事を思い起こします。イエス様はもう墓の中には居られませんでした。墓も死もイエス様を留めておくことができませんでした。イエス様は復活なさいました。その時のことをまさに思い起こします。

5:24 この報告を聞いた神殿守衛長と祭司長たちは、どうなることかと、使徒たちのことで思い惑った。

心から一体どうなってるのかと、深く心が戸惑ったということが記してあります。そして彼らはこの後どのようになるのかと不安になりました。

彼らは自分たちの権威が絶対だと思っていましたが、それに抗う何か不可解な大きな力が働いていることを思いととてもとても彼らは困惑しました。力を合わせて立ち上がり、仲間意識をもって団結し、誰も自分たちには逆らえないと立ち上がって意気込んでいる彼らですが、心の内は大変慌てふためいて、彼らの心は動揺に満ちていました。

5:25 そのとき、人が来て、「御覧ください。あなたがたが牢に入れた者たちが、境内にいて民衆に教えています」と告げた。

5:26 そこで、守衛長は下役を率いて出て行き、使徒たちを引き立てて来た。しかし、民衆に石を投げつけられるのを恐れて、手荒なことはしなかった。

守衛長は下役を率いて出て行き、使徒たちを引き立てて来ましたが、手荒な事はしませんでした。民衆に指示のある使徒たちに手荒なことをしたら、自分たちが石内にあってしまうかもしれないと思っていたからです。彼らは権力の内にあるという地震とは裏腹に、恐怖がありました。恐れていました。困惑がありました。心の宇都には動揺が渦巻いていました。平安がありませんでした。しかし彼らはそれでも悔い改めをしませんでした。これが大祭司や仲間の学者たちそして最高法院と長老会全体、そして守衛長とその下役たち、その崇め奉られついた人たちの哀れな弱々しい現実でした。

彼らは自分たちの中の誤りにうすうす気づいていながら自分たちの権威が侮られることを恐れて自分たちの身の事ばかり考えて、他ならぬ最も恐れなければならない神様の前にひれ伏し、懺悔し、心入れ替え、悔い改め、心の向き変えて出発する機会を失ってしまいました。

しかし私の弟子たちは何にも妨げられずに力強く立ち上がり、神殿にて、どんどん命の言葉であるイエスキリストを証しする神の霊によって、神様のみ声と解放の御業によって力を得て活躍して行きました。

私たちが何を恐れるべきでしょうか。私たちが神様をのみ畏れ、力あるお方、死者を復活させることができになることを恐れて進んで行きたいそのように

願うのです。恐れ之夜には解決の希望の朝が来る。神様が共にいて下さって救い出して下さり、力付けてくださることを教えられました。

それは私たちが行って立ち上がりこの命の言葉を残らず民衆に告げ知らせるためです。私たちが祝福をいただいて苦難から助けられ守られているのは、立ち上がりこの命の言葉を残らず民衆に告げ知らせるためです。今週も何をも恐れず神様のみを畏れ、信じ希望を持ってここから進ませていただきたいと願います。